



土岐市教育研究所
TEL 0572-54-1111 (内374)
FAX 0572-55-6310
メールアドレス kyoiku@city.toki.lg.jp
所報 No. 574
発行責任者 所長 河合 広映
発行日 令和6年3月15日
題字 山田 恭正 教育長



「百五十周年記念
わたしたちの夢をのせて
とんでいけ」
撮影 肥田小学校
中村光代 校長先生

「上書き保存と名前を付けて保存」

土岐市教育研究所長 河合 広映

2023年、三省堂、辞書を編む人が選ぶ「今年の新語2023年」の大賞は「地球沸騰化」でした。「地球温暖化」が深刻になった段階を指す言葉で、2023年のグーレス国連事務総長の発言によるものです。この言葉以外にも、「ハルチネーション (AIが事実に基づかない情報を生成し、まるで幻覚を見ているかのようにふるまう現象)」や「かわちい (かわいいの言い換え)」「トーンポリシング (論点をずらすこと)」などが新語のトップ10に入っています。私などは、トップ10のうち、7~8は全く聞いたこともなく、意味の分からない言葉でした。ある限られた人たちの中で使われ始めた言葉が、SNS等を介して広がり始めて、あっという間にはやり言葉になるという現象は、時代とともにそのスピード感も早まっています。これらとは逆に、知らぬ間に辞書から消えていった言葉もあります。

「三省堂国語辞典から消えたことば辞典」によると「コギャル」「企業戦士」「CQ (アマチュア無線用語)」「ゴーイング・マイウェイ」など私たち世代の者にとっては懐かしい言葉が辞書から消えていっているようです。「コギャル」ってつい最近の言葉だったような、とか、「ゴーイング・マイウェイ」は今も使うぞ、と思いながらも、今の若い人たちにはすでになじみのない言葉になっているようです。あるテレビ番組で、今の小中高生は「社会の窓」といっても何のことかわからないという特集を見ました。小中高校生がこの言葉を聞いてポカンとする様子が印象的でした。消えたということは、もちろんこうした言葉が辞書に記載されたある時期もあるはずですが。その時代・時代を表す「言葉」も新旧交代があるのです。ページ制限があるという限られた条件の下、古いものは消え、新しいものが増えるという意味でいえば、辞書の新旧交代は「上書き保存」になります。これはスマホなどのアップデートと同じ考え方になります。学校には、こうした上書き保存的なアップデートはあるのでしょうか？

まず、誰もが思い浮かぶのは、コロナ禍以降のICT教育への急速な発展に対する情報化のアップデートは思い浮

かびます。これまでのチョークと黒板、鉛筆とノートで行ってきた授業からの脱却。タブレットを文房具の一つとして使いこなしている小中学生を見ると、以前と授業風景が変わったなあと感じさせられます。次に、考え方のアップデート。通学カバンの重さを考慮して「置き勉」は当たり前になりました。学校に家庭で使わない教科書やノート、資料集を学校に置いていくという考え方が現在は浸透しています。中学校では制服の考え方も変わりました。また、これは、コロナ禍も影響しているのかわかりませんが、これまでの学校のルールに対する考え方が柔軟になったと感じています。例を挙げると、市内の中学校を見ても防寒着など身に付けるものの考え方は柔軟になったと感じます。一例を挙げましたが、学校の「環境整備」や「体制整備」では急ピッチにアップデートが行われているような気がします。これらはもう、昔の形に戻ることはいけません。学校の不思議なルールに「昔からの伝統だから」という不明な理由を無理やりつけて行っていた活動は随分と減ってきたような気がします。

ところが、学校という所は常にアップデートをしなければならぬと同様に、残していかなければならないことも多くあると思うのです。「名前を付けて保存」の大切さです。昭和の歌もたまに聞くと味があっていいと思える世界のように、学校は昔からの文化を継承していく場所だと思うのです。だから、先の授業の例についても、これからは黒板・チョーク、ノート・鉛筆を減らし、タブレットのみの授業へ転換していくというのは飛躍しすぎた発想だと考えています。上書き保存と名前を付けて保存することを状況に応じて柔軟に行いながら、消してしまっても上書きしてもよいものとマイナーチェンジを繰り返しながら部分的にも残しておいた方がよいものを考える時期が、来年度の方向を考えていく今の時期だと思います。引継ぎがそろそろ行われます。来年度の計画を考えていくとき、本当に上書きして変えてしまってもよいのかどうかと、ちょっと立ち止って考えてみる必要があると思うのです。



「ふるさと大好き妻木っ子」を目指して



妻木小学校長
工藤 剛士

妻木小学校は、今年度創立150周年を迎えました。誕生したのは明治6年6月、1873年のことです。当時は地域で校舎建設を行わなければならない、妻木村では廃寺になった建物を学校として使うことになったようです。何回かの移転・増改築ののち、現在は校舎2棟、ワークスペース棟、体育館、プール、運動場、冷暖房、一人一台のタブレット等を備え、以前と比べるとずいぶんと快適な学校生活を送ることができています。しかし戦後1000人を超えた時もあった児童数も今年度は236人、最盛期の約4分の1の人数で、今後も減少が予想されます。

1 ふるさと教育の必要性

妻木小学校に限らず、児童数の減少は地域にとって心配な問題です。さらなる心配は、地域についてあまり学習していない→よく知らない→地域に愛着がもてない→大学や専門学校など外に出ると地元に戻ってこない→人が少なくなっていく という悪循環におちいることです。

逆に、地域のことを保護者や地域の方から学ぶ→よさを知って愛着をもつ→大学や企業などいったん地元を離れても帰ってくる→地域で生きる・活躍する という好循環が生まれます。だからこそ、第3次そして第4次岐阜県教育振興計画にも重点施策として示されているように、ふるさと教育が大切なのだと考えます。

2 学校運営協議会との連携

そのふるさと教育を進めていくうえで、地域の優れた人材を活用しない手はないです。そこで、妻木小学校では学校運営協議会のお力を借り、ふるさと教育を進めてい

ます。一つの大きな特徴は、年度当初に地域の指導者と教員全員が顔を合わせ、年間の計画を立てる場をもっていることです。本校へ来たばかりの職員も地域指導者の顔を知ることによって企画運営がしやすくなり、地域ぐるみの教育を生み出すもととなっています。

3 150周年記念集会と記念事業

11月に創立の記念集会を行いました。児童、保護者、地域の方が参加しました。6年生は、「今妻木について勉強しているけど、もっと妻木について知りたいです。」
「6年生になってマスクが外せるようになりました。開放感がありました。やっと再開したしろやま集会でみんなで久しぶりに校歌を歌い、懐かしいなと思いました。」
「50年後の創立200年の時も学校に来てみんなで祝いたい。」など学校再開や母校への思いを語りました。

またPTA主催で、もち投げや花火など記念事業を行い、150周年に花を添え、子どもたちにとって一生の思い出となりました。

4 「ふるさと大好き妻木っ子」を目指して

妻木小学校運営協議会の合言葉は「ふるさと大好き妻木っ子」です。妻木小学校の校歌に「流れも清き妻木川」「軒端に仰ぐ城山」が歌われているように、150年前と変わらず、妻木は豊かな自然に囲まれ、緑があり、青く澄んだ青空や妻木川があり、子どもたちの生活の一部となっています。創立150年の歴史と伝統を感じて、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りがもてる子どもたちの育成に教職員一丸となって、そして地域とともに努めてまいります。

【幼稚園教育の紹介】

『3つのゾウ』で『明るくたくましい子』を育てる

肥田小学校附属幼稚園

田中 英治

本園の教育目標は『明るくたくましい子』です。この教育目標の具現のため、『心豊かで丈夫な子』、『自分の力でやろうとする子』、『仲よく遊ぶ子』を具体的な姿としています。

その姿を分かりやすく保護者や子ども達に伝えるため、昨年度より、『げんきだゾウ』、『がんばるゾウ』、『なかよくするゾウ』という3つのゾウを合言葉とし、イラストで示し、活用してきました。



げんきだゾウ

そして、この3つのゾウの活用として、毎月、月末に園児の意識調査を行ってきました。この意識調査では、その月に子ども達が大きくなったと思うゾウと、担任が大きくなったと思うゾウについて、担任と子ども達が話し合いを行います。

3つのゾウは、入園式の時に各クラスにプレゼントしており、この調査で、子どもや担任が大きくなったと思うゾウを順番に大きくしていきます。3つのゾウが大きくなっていくことで、子ども達が遊びや生活に自ら目標をもったり、担任が願う姿を明確にし、月や週の計画に反映させたりすることができました。

1月に行った保護者への園評価では、

園目標が子どもにも周知され、帰りの会で「今日はどんなゾウを見つけた。」など話してくれ、楽しそうに学びながら園に通わせていただき、ありがとうございました。

という感想もいただきました。

さらに、この調査では『幼稚園が楽しい』と感じている子が何人いるかも確認します。この調査をすることで、子ども達が本園に安心感をもって登園できているか、今、子ども達が何に興味や期待をもって園生活を送っているのかを確認することができます。



がんばるゾウ

さらに、この調査では『幼稚園が楽しい』と感じている子が何人いるかも確認します。この調査をすることで、子ども達が本園に安心感をもって登園できているか、今、子ども達が何に興味や期待をもって園生活を送っているのかを確認することができます。

この調査をすることで、子ども達が本園に安心感をもって登園できているか、今、子ども達が何に興味や期待をもって園生活を送っているのかを確認することができます。

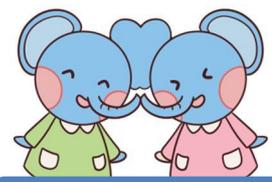
年度当初は「戸外遊びが楽しい。」「教室にあるブロック遊びが楽しい。」などを理由にあげる子どもが多かったが、次第に、「友達と一緒に（お店屋さんごっこ）品物を作ることが楽しい。」「みんなで鬼ごっこをすることが楽しい。」など、仲間と共通の目的をもって遊んだり、ルールのある遊びを楽しむようになったりと、子ども達の“楽しい”の中身の変容にも気付くことができました。

また、今年度、特に力を入れた活動が異年齢交流活動です。この活動を『わくわくたいむ』と名付け、5歳児が主導して遊びの環境設定を行いました。園内マップを使って3・4歳児に遊びを紹介（下の写真参照）し、園庭に掲示することで、小さい子どもでも、どこにどんなコーナー遊びがあるのかを知り、自分で行きたい遊びを見付け、興味をもって、いろいろな遊びを楽しむことができました。



異年齢の友達と一緒に、運動遊びやコーナー遊び等を楽しむ中で、年下の子の世話をしたり、年上の子に優しくしてもらったりする経験ができ、活動を通して相手を思いやる心や、人と関わる力が育ちました。

もうすぐ、園児たちは進級、進学を迎えます。この1年間で大きくなった3つのゾウを自信にして、新しいステージでも自分の力を発揮し、さらに伸ばしていくことを願っています。



なかよくするゾウ

令和5年度 【土岐市教育実践論文】 入賞者

NO	賞	園・学校名	教科・領域	氏名	論文テーマ
一般の部	優秀賞	泉中	音楽	江崎 紀子	主体的・協働的に音楽を学ぶよさを実感できる生徒の育成 ～鑑賞領域において音楽的根拠を探る「知覚」と「感受」の往還と、学びを再構築し課題価値を見出す動機付けを通して～
	優良賞	下石小	国語	田口 俊介	伝えたい思いや考えを明確にして表現できる児童の育成 ～国語科「書くこと」の授業や日常的な指導を通して～
	優良賞	西陵中	理科	安藤 亮	個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実 ～「西陵式対話型授業」を通して～
	優良賞	土岐津中	社会科	高木 良太	社会科における思考力・判断力の育成 ～p4cを用いた対話に重点を置いて～
	優良賞	土岐津中	特別活動	江崎 大三	確かな生徒理解から「思いを拾いあつめる」 ～複雑、多様化する生徒が抱える困難への支援～
	優良賞	泉中	健康安全	金子 あかり	自他健康、命を大切にできる生徒の育成 ～包括的性教育と命の教育を通して～
	学校特別賞	濃南小中	管理経営	濃南小・中学校 一貫教育推進委員	チーム制による小規模小中一貫教育の推進
新人の部	新人賞	泉小	体育/保健体育	仙石 健太	児童が主体的に考え、スポーツを好きになる体育科学習 ～ティーパールの実践を通して～
	入選	妻木小	健康安全	鈴木 紘乃	生活習慣改善に向けての健康教育 ～健康に生活できる子を目指して～
	入選	肥田小	音楽	可兒 美緒	音楽を学ぶ楽しさを実感する児童の育成 ～基礎知識の習得とタブレット端末の活用を通して～

令和5年度 【土岐市教育実践記録】 入賞者

賞	園・学校名	氏名	作品(記録名)
教育長賞	泉中	阿部 聖一 蜂谷 鋼	正面玄関前ウェルカムボード 兼「学校の足跡」
教育長賞	泉中	橋本 壮平	ICTを活用した朝の短学活メッセージ
教育長賞		土岐市ICT教育推進委員	土岐市ICT教育実践事例集
特別賞	濃南小	岩崎 礼佳	保健掲示物
特別賞	駄知小	小木曾 欣巳	理科教材
特別賞	肥田小	足立 佳美	多文化共生だより(外国人指導教諭)
特別賞	泉小	松本 未央	ICTを活用した授業記録
特別賞	泉中	大野 篤司	Word Marathon
特別賞	泉中	蜂谷 鋼	おはようメッセージ
特別賞	泉中	毛利 知美	布(繊維)の種類

令和5年度 教育実践論文審査講評

審査委員長 土岐市立土岐津中学校長 塚本 修

土岐市の小・中学校教育方針『『やってみよう』を引き出し、『できた』『わかった』と実感できる授業の実現』をふまえ、目指す児童生徒の姿の実現に向けて指導法や指導形態を工夫し、その実践と成果を論文にまとめてくださいました皆様に心から敬意を表します。

今年度の論文から学び、土岐市の教育がより一層充実することを願い、成果と課題を記します。

1 応募状況

出品総数は、小学校8点、中学校11点の合計19点でした。内訳は、一般の部対象が12点、新人の部対象が7点でした。教科・領域別では、教科12点、各領域7点となっています。「こんな児童生徒にしたい」「こんな力を身につけさせたい」という、先生方の「強い願い」「熱い思い」が伝わる実践が多かったことが特徴的でした。

2 教育実践論文にみられたよさや成果

(1) 今日的な課題に深く切り込んでいる

「主体的」「協働的」「個別最適な学び」「思考力」「表現力」「ICT」「不応適生徒」等、今日的な教育課題に深く切り込み、その有効性について検証した実践が多くありました。実践された先生方の前向きな姿勢とよりよい指導法を明らかにしたいという強い思いの表れであると感じました。

(2) 追究の過程が明確で一貫性がある

「目指す姿」「つけたい力」を明確にし、手立てをもとに実践を積み重ね、児童生徒の変容を捉えていく過程において一貫性がありました。先生方の児童生徒への「熱い思い」が、目指す姿をより具体的に描くことにつながっており、実践後の成果と課題を論じる段階まで一貫性が保たれているのだと感じました。

(3) 継続的に指導可能な実践がなされている

特別な授業や特定の行事による実践事例でなく、毎日の教室で営まれている日常の教育活動を検証している実践ばかりでした。他教科でも活用が可能な点や今後も継続的に実践可能な点でも優れた実践ばかりであったと感じました。

(4) 将来直面する学校課題を共有する

濃南小・中学校一貫教育推進委員より「チーム制による小規模小中一貫教育の推進」についてご提案をいただきました。少子化の波を受けて、近い将来に多くの学校が直面する学校課題について実践をまとめられ、それを共有できたことは大きな意義があると感じました。「学校特別賞」とさせていただきます。

3 今後の課題

・「できた」「わかった」と実感し目指す児童生徒の姿を実現するために、数値化、言語化、日常化等、よりいっそう根拠を明らかにして児童生徒の変容を捉えられるようにすると、説得力のある論文になると考えます。

経験年数に関係なく、先生方がよりいっそう指導力を高め、価値ある実践を広く共有するためにも、各教科や領域において多くの先生が教育実践論文に挑戦されることを願っています。

令和5年度 土岐市教育実践記録 審査講評

土岐市教育研究所 主任 片田 誠

今年度も、教師の指導力向上を主な目的として、教育実践記録の募集をしました。今年度で7年目となります。また、実践の内容を、校内、市内へ広げていくことによって、特に若手を中心とした先生方の日々の実践に役立てていただきたいという願いもあります。

今年度応募していただいた14点の実践記録は、いずれも、工夫と継続性が見られ、熱意溢れるものばかりでした。審査の結果、「教育長賞」3点、「特別賞」7点、「奨励賞」4点を選ばせていただきました。その中で「教育長賞」に選ばれました3点の実践記録について、紹介します。

◇『正面玄関前ウェルカムボード 兼「学校の足跡」』阿部 聖一 先生, 蜂谷 鋼 先生(泉中学校)

来校者に向けた案内とともに、生徒の具体的な姿や活動の様子を示しながら、生徒に向けて、継続的に価値付けや方向付けをされてみえます。こうした指導や実践の積み重ねが素晴らしいです。また、学校の教育目標や校長の学校経営方針をしっかりと踏まえてみえることや、写真を使用したりキーワードを強調したりして、視覚的にも分かりやすく工夫してあることなど、他校の参考になるご実践です。

◇『ICTを活用した朝の短学活メッセージ』橋本 壮平 先生(泉中学校)

これまでの「朝の短学活で、学級通信や黒板に書いたメッセージをもとに教師が話をしてきた」実践について、「今年度は key note を活用した」というように、日々の実践を振り返り、さらに改善・発展を図られた点が素晴らしいです。このことによって、写真や動画で生徒の具体的な姿を紹介することができ、生徒たち自身による活動の振り返りや、よさや成果の実感につながるご実践になっています。

◇『土岐市 ICT 教育実践事例集』土岐市 ICT 教育推進委員

ICT の効果的な活用方法について、授業における今年度の市の重点的な取組である「授業の土台 3視点」に沿った実践とポイントが、写真や吹き出しで大変見やすくまとめられています。市内すべての学校の ICT 教育推進委員の皆さんが、自校から数名の先生方の実践を持ち寄られた結果、合計42名の先生方のご実践が集められており、市の ICT 教育の推進に役立つ事例集になっています。

土岐市の子どもたちに付けたい力を付けるためには、教師一人一人が指導力を付けることが必要です。そのためには、じっくりと考え試行錯誤し、挑戦することや、節目節目で子どもの姿や教師の指導・援助の在り方を振り返ることが大事だと考えます。今後も、子どもを主体として、日々の実践を積み重ねていただきたいです。来年度、さらに応募が増えることを期待しています。



読書活動推進室より

生涯学習課課長補佐／青少年女性係長
読書活動推進室 河合 哲仁

本年度割愛として本課に配属され、様々な業務の中に「読書活動推進室」がありました。決して私が読書をすごく好きであるとか、日頃から本をたくさん読んでいたとか、そういう理由で配属されたわけではないと思われそうです。私自身を振り返ると、若かりし頃入院して身動きが取れない時、まだ国内に出たばかりの「ハリーポッター」を夢中で読んだことがたぶん人生で一番集中して一気に読んだ分厚い本であろうと記憶しています。そしてその時、全く本を読む習慣がなかった私をこれだけ夢中にさせたのだから、「この本は売れるかもしれない」と、そんなおこがましい予測を立てたことも覚えています。

しかしながら、読書活動の推進に関わらせていただくことで、様々な点で学ぶことが多くありましたので、それらを基に述べさせていただきます。

「本は読んだほうがいい」。

それはきっとほとんどの人が感じていて理解できていると思われそうです。ネットで読書について検索してみますと、語彙力、表現力、集中力、人間力などなどその具体的なよさ、効果などがいくらかでも出てきます。

国は、そんな読書の力を広め高めようと「子どもの読書活動の推進に関する法律」を基に、平成13年から定期的に見直しを行いながら、子どもの読書活動を強く進めており、地方自治体の役割についても触れられています。

では、土岐市についてです。R5年度の全国学力調査の結果によりますと、市の児童生徒の読書率については不読率（平日1週間に一冊も本を読まない割合）の高さ（小学6年生22.9%、中学3年生39.8%）が課題として浮き彫りになりました。特に中学3年生は全国や県の平均を3～4ポイント下回っているという状況でした。

本課としては、この現状をより具体的に把握し、改善につなげるために、各校の先生方や司書支援員さんらに多大なるご協力をいただき、様々なアンケートを実施させていただきました。

その中で注目したものは、「読書がきれい」という児童生徒の内情です。

「きれい・どちらかといえばきれい」と言う子は小学生12.9%、中学生24.8%でした。そこでさらに、その子たちに「読書のよさ」を問うと、「良いところは、ない。またはわからない。」と回答する子は、小学生14.6%、中学生25.8%でした。この中学生の回答は、私の予想より少ない印象でした。さらに中学生に注目してみますと、回答の上位3つは、「考え方が身につく」「表現を学ぶことができる」「新しいことを学べる」が各30%程ありました。

つまり、中学生の中には、読書のよさはわかっているのになんだか「きれい」、逆に言えば、「きれい」だけそのよさはちゃんと理解しているということです。本に限らず世の中にそのようなどこか事象はたくさんあふれていますが。

さらに、「好き」だけその月は1冊も読ま（め）なかった子、「きれい」だけ読んでいる子もある程度いることもわかりました。それらの回答に「推進」の糸口があるように思います。

別の国の調査によると令和4年度の1か月間の不読率は小学生6.4%（土岐7.3%）、中学生18.6%（同20.2%）だったそうです。国としては、令和29年度の会議で5年後（令和4年度）のそれを小学生2%以下、中学生8%以下という数値を目標値としていましたが、思うように進むどころか、乖離した数値ということになります。

読書のよさは周知されており、国の政策として取り組まれている以上、日本人や日本にとって有益と判断されている事業といえるのでしょうか。

様々な情報媒体と同様に本も身近にあふれていて、少し手を伸ばせば触れることができる環境が整っています。我々は時々そっと児童生徒の背中を押し、例えば本は嫌いなままであったとしても「やっぱり本は読んだほうがいいな」と心揺さぶられる経験をさせてあげたいです。私も、自身の記録を破る日が訪れますように。入院ではなく。



「誇りある人を育てる」という誇り

駄知中学校 教頭 坂野 晃規

小学生の頃から、教員になりたいと思っていました。父は土木建設会社で働いていました。街を歩くと、父の会社が手がけたダムや高速道路、都市などが至る所に見られました。これらの建造物が10年後、20年後も残っていることを考えると、それを手掛ける仕事にも魅力を感じるようになりました。

そして大学3年になり進路選択を迫られた時、自分の中で教職と土木職との間で迷いが生じました。

ある日、友人と進路の話になった時、自分のその迷いについて話してみました。すると、友人は「教員は、君が誇りに思っているような仕事をやる人間をたくさん育てることができる素晴らしい仕事なんじゃないかな」と言いました。私は、その言葉に深い感銘を受けました。自分が関わり、成長を見守った生徒たちが、将来多くの社会や人々のために活躍する姿を見ることができるとは、本当に誇りに思える仕事なのではないかと思

いました。そして、その瞬間、私は教員の道を選ぶことを決意しました。

今でも「10年後、20年後に社会や人々の役に立っている人々を、一人でも多く育てたい。」という願いを胸に、日々、児童や生徒、先生方と真摯に向き合っています。教員としての使命は、ただ知識を伝えるだけでなく、未来への希望となる種を蒔き、人々を育てることにあります。だからこそ、日頃から自分で動くことの大切さを伝えたり、新しいことに挑戦することの楽しさや、できることが増えた時の喜びを実感させたりしたいと思っています。

今年も卒業式の季節がやってきます。卒業式がやってくるたびに、巣立っていく卒業生を見て「10年後、20年後のこの国をよろしく。」と心から思います。そして、卒業生たちが作った素晴らしいものであふれる輝かしい未来を楽しみにしています。



令和5年度 第45回土岐市教育文化賞 授賞者の皆さん (敬称略)

<教育功労賞>

土岐津小学校 校長 三宅 裕一
土岐津中学校 教諭 田口 里美、土岐津小学校 教諭 堀部 泉、駄知小学校 教諭 加藤 恵
駄知小学校 教諭 木村 尚美、駄知小学校 教諭 小木曾 欣巳
西陵中学校 課長補佐 内山 満彦

<学校教育賞>

土岐津小学校、土岐津中学校

<文化賞>

後藤 明日奈 (土岐津小2年)、牧田 春 (土岐津小3年)、高木 美羽 (土岐津小4年)
安藤 杏果 (下石小5年)、原 千莉 (駄知小5年)、山上 颯土 (泉小2年)
水野 いつみ (泉小4年)、熊谷 紬 (泉西小6年)、中村 亘我 (泉中3年)

<スポーツ賞 個人>

法輪 泰良 (土岐津小3年)、大矢 芽依 (土岐津小4年)、法輪 祐輝 (土岐津小5年)
水野 瑠菜 (妻木小6年)、丹羽 こころ (泉小1年)、丹羽 煌貴 (泉小5年)
高木 愛莉 (泉小5年)、畑中 芽衣 (泉小4年)、畑中 康佑 (泉小6年)
池田 隼哉 (土岐津中3年)、伊藤 健 (土岐津中3年)、浅野 桃夢 (土岐津中3年)
坂元 琉海 (土岐津中3年)、川本 翔弥 (西陵中1年)、村上 希愛 (西陵中1年)
林 芽衣奈 (西陵中1年)、林 美月 (西陵中3年)、酒井 偉生 (駄知中2年)
楓 桃香 (肥田中3年)、宮下 秀佑 (泉中1年)、山口 仁之恭 (泉中1年)

<スポーツ賞 団体>

「泉中野球クラブ」：加藤 宙愛 (泉中3年)、後藤 恵多 (泉中3年)、藤田 伶也 (泉中3年)
酒井 奨斗 (泉中3年)、政山 琉星 (泉中3年)、小栗 大貴 (泉中3年)、酒井 優人 (泉中3年)
谷田 翔太 (駄知中3年)、村上 皓祐 (駄知中3年)、ノーヤン アザド ベッグ (駄知中3年)

「おりべドリームズ」：広沢 聡美 (泉小6年)、岩木 姫菜乃 (泉小6年)、高木 瞳有 (泉小6年)
加藤 柚咲 (泉小6年)、広沢 静菜 (泉小4年)、高木 美楨 (泉小4年)、木村 彩蘭 (泉小4年)
曾根 光織 (妻木小6年)、水野 和奏 (妻木小5年)

「岐阜 DREAM BLAZE」：岩木 くれ亜 (泉中2年)、大鋸 美希 (泉中2年)
井戸 莉桜 (泉中2年)、下城 優月 (西陵中2年)、池田 美空 (西陵中2年)

おめでとうございます

